

## 民俗芸能伝承の構造

### — 佐渡鬼太鼓の事例から —

## The structure of the Transmission of Folk Performing Arts: A Case Study on *Oni-Daiko* in Sado Island

伊 野 義 博

### 1. 何が芸能を伝えるのか

佐渡の各集落に点在し、佐渡を代表する芸能である鬼太鼓は、今でも多くの若者を夢中にさせ、祭りになくなくてはならない存在となっている。現在、過疎化の波の中、全国いたるところでムラの芸能が消滅しており、鬼太鼓もその渦中にあるが、事情は多少異なるように思える。

というのも佐渡をまわって実感することだが、鬼太鼓はまだまだ自らのエネルギーを保ち、過去の遺産となることを拒み、祭りの核として、人々の心の支えとして、生きた形で厳然と存在しているからだ。加えて心強いのは、新たな文化創造の革新としてムラを超え、佐渡を超えて大きく羽ばたいてさ

いることだ。

それは、鬼太鼓が、消えゆく芸能にはない〈何か〉を内包し、それが佐渡の風土の中で、佐渡人の身体や精神と反応し合い、強固なものとなっているからだろう。だとすると、この際その要因を探るのは意味のあることと考える。

本稿の試みは、おそらくは無数に絡み合う要因のうち、鬼太鼓が持つ構造と伝承の形に視線を落として考察し、それらが今後の継承に示唆するものを浮かび上がらせることにある。

### 2. 人や芸能をつなぐ強固なWeb構造

#### 【鬼太鼓の構造】

鬼太鼓は、その名が示す通り、鬼と太鼓により成立している。太鼓を打つことと鬼が舞うことが一体化した芸能である（写真1）。太鼓だけでも鬼の舞だけでも鬼太鼓にはならない。どちらが主人公ということも難しい。たとえば民謡流しでは、時にスピーカーから流れる音源により踊ることは珍しくはない。唄い手が不在の場合、その音源は、あらかじめ録音したものにする 것도可能である。各地の祭りをみると、囃子の笛の吹き手や太鼓の叩き手がいなくなり、かろうじて過去の録音を流してその命脈を保っているところもある。しかし鬼太鼓の場合、太鼓のCD伴奏で鬼の舞を舞おうなどと思う佐渡人は一人もいないだろう。また、鬼の都合がつかないので、太鼓だけで済ましてしまおうなどといった発想もない。これは鬼太鼓にとって当然のことである。しかし、太鼓のみの芸能や音楽を付随的に扱



写真1 鬼太鼓（上梅津）

い、舞うことを主とした演目があるのを考えれば、「鬼と太鼓」が不可分であり両者の相互関係により成立しているということは、鬼太鼓の特徴といってい

いいだろう。

すなわち鬼太鼓とは、叩き手と舞い手の双方が、互いの呼吸を感じ取り、刻々と変化するリズムや動きの中で、身体を呼応させながら立ち現れる共有の表現行為である。太鼓から打ち出される微妙な「間」や鬼のすり足や面の振りなどの多様な所作の有り様の一瞬の変化を、演じ手双方が全感覚を総動員して感じ取りながら眼前に「成っていく」芸能である。舞は太鼓にのり、打ち手の視線は、舞い手に注がれる。いわゆる渦上型といわれる太鼓では、桴のリズム型に対して「ジバチ」「ハヤバチ」「アワセバチ」などの呼称が用いられたりするが、たとえば、「ジバチ」のリズムに合わせて舞っていた鬼は「ハヤバチ」になるとたちまちそのリズムの縛りから開放され空間に放たれ、縦横に舞い始める。太鼓のリズムは、即興も交え、どれも個性的だ。「デスコデスコ」の基本リズムに「デンデン」「スケデンデン」等々、多様なタイプが瞬時に付加され、打ち手の妙味が反映したオリジナリティのある太鼓が生み出される。「俺の太鼓」と「あいつの舞」は時に強烈に反駁しながらも融合し、その時にしかない「俺たちの鬼太鼓」が創り出されていく。

鬼太鼓のこうした太鼓と舞をつなぐくみは、打ち手と舞い手の身体をつなぎ、結果として双方の思いまでつないでいく。直接的に演技をするのは、わずかに二人、太鼓と鬼である。しかし、この二人は固定されない。次々と交代していくことにより、個々人は集落のいろいろな打ち手や舞い手と共演し、結果として参加者それぞれと強く結びついていく。「呼吸が合わなければ舞えない」という厳しい現実の中で、打ち手や舞い手相互の競合意識をも醸成・内包しながら、芸質が高まり、ついには太鼓の名手やすぐれた舞い手が生み出されていく。これらの繰り返しの途中で、やがてそれぞれの「思い」が網目のように結ばれ、強い絆の集団となっていくのである。

鬼太鼓は、一人の打ち手と一人の舞い手が最小単位である。そしてこの基本構造の持つ性格が、前述のような網目状の関係性を生み出す必然性を備えている。しかも出来上がった関係性は、太い綱で結ばれた目の細かい強靱な綱となる。

### 【門付け】

前述の鬼太鼓の構造が、担い手の強い絆をつくりだしているとしたら、ムラの絆を堅固にするのは門付けである(写真2)。各戸への鬼の訪問は、祭祀的な意味だけではなく、集落の維持やまとまりに大きな影響を及ぼしている。



写真2 門付け(春日)

祭りの日、鬼太鼓は集落を一軒一軒まわり祓いをする。大きな集落では、一日に数百件の門付けが行われる。玄関やあるいは神棚が祀られる座敷に鬼が招かれる。上梅津では、こうした座敷を「おいえ」と呼んでいた。「おいえ」は「御家」であろうか。鬼は太鼓のリズムにのって「おいえ」に入りこんで舞い、お祓いをし、家の繁栄を約束する。舞い終わると、用意された酒や祭りのご馳走を家人とともに食す(写真3)。

鬼太鼓の門付けに特徴的なのは、各家へ来訪する鬼の正体は、実は同じ集落に住む人々であり、来訪時に酒宴を伴い、思いっきり祭りのご馳走を饗応し、神人相饗の中、一種の無礼講状態において相



写真3 「おいえ」に入り込む鬼(上梅津)

互のつながりを深めること、そうした門付けが基本的に集落の全戸に及ぶことにあるだろう。門付けの後、鬼は面をとり、隣家の若者となるが、これは例えば同じように面をつけた異邦の来訪者である村上市大栗田の「あまめはぎ」や秋田の「なまはげ」などと異なる点である。「あまめはぎ」の場合、訪問先で面をはずすことはない。来訪神はあくまでも来訪神として立ち去っていく。各家にとって、鬼は期待すべき来訪神であるが、それと同様に演ずる若者集団もまた待ち焦がれた訪問者であり、祭りの楽しみを共有するムラ人なのである。こうして鬼太鼓は、家をつなぎ、人をつなぎ、その網目の範囲を広げつつ強固にしていく。

#### 〔点在・移動・参集・競合〕

点在すること、移動すること、参集・競合すること、こうした鬼太鼓の持つ性格は、伝承のしくみを一層強固にしている。

鬼太鼓の一つのまとまりは、他のまとまりと協力、競合し合いながら大きな単位を形成する。個々のグループの共通性や差異が集落の内外において、さらに大きな網目構造をつくりだしている。

一般に鬼太鼓は、数人がまとまって門付けをしていくが、集落が大きな場合は、こうしたグループが複数できる。その場合、祭りの最後には、神社に集合し、各グループの競演が行われることが多い。上梅津では、日中二つに分かれて門付けをしていた鬼たちが、最後は「ふれあいセンター」前に参集し、それぞれこごぞとばかり演技の見せ合いとなる。

このケースで典型的なのは「宮入り」だろう。たとえば、小倉の場合、日没後に物部神社境内で行われる宮入りには、終日集落を門付けしたグループが参集し、一斉の競演となる。ここを最後とあらんかぎりの力を振り絞り飛び跳ねる鬼の姿は、実に見応えのあるものであり、地区民の大声援の中、祭りは最高潮に達する。

鬼太鼓は、佐渡の各集落に点在するが、新穂日吉神社山王祭りでは、八王子、舟下、大野、新穂の太鼓が日を変えて参集する。日吉神社では、各地区それぞれの鬼太鼓が奉納される。こうした形式は、日吉神社がこの新穂地区の集落の総鎮守であったことから生まれたものと思われる。

このように、それぞれのグループやそれぞれの集落に点在する鬼太鼓が移動し、集まるということは、佐渡では自然な発想であり日常的な光景だ。

こうした背景には、佐渡の地勢や集落構成、そこ

に生きる人々の生活が強く影響していると思われる。佐渡の各集落の位置は、その地形を反映し、海岸に沿い、あるいは山間部において、少しずつ離れて島全体に点在している。鬼太鼓は、こうした佐渡という独特の集落構成の中であちこちに生まれ育ってきた。鬼太鼓が育まれるには、佐渡という土壌は最適だったのである。別な見方をすれば、佐渡の土壌が豊かな鬼太鼓文化を育んできたともいえる。

点在し、移動・参集するといった性格を持つ鬼太鼓は、このようにして自分の場を離れて集まり競演することを好む。それぞれの鬼太鼓は、他のグループの演技を強く意識、競合し、全体として壮大なパフォーマンスを実現する。個々の特徴を主張し、浮き彫りにするその姿は、結果として、多くの人を呼び込むことを可能にする。一つ一つの鬼太鼓の持つ連結本능が、さらに大きなWebをつくり出しているのである。昭和60年以来継続された「佐渡國鬼太鼓in原宿」や近年の「佐渡國鬼太鼓どっとこむ」は、こうした典型だろう。

### 3 伝承の形とその変容

点在する集落の中で生まれ育ってきた鬼太鼓は、それ故に、過疎化の波に弱く、しばしば存続の危機にさらされてきた。そして現在もまさにその渦中にある。このような中で、人々は、どのような形で鬼太鼓を伝えてきたのだろうか。管見ではあるが、いくつかの事例をあげてみよう。

#### 〔小倉〕

手元に昭和52年6月5日、小倉小学校運動会において記録された小倉地区旧三社鬼太鼓の録画がある。35年前のビデオの中で主催者は次のように語る。

当地小倉には古くから他に誇るべき鬼太鼓をはじめ、幾多の郷土芸能が伝えられていたわけであり。しかし、近年著しい全国的な過疎化現象には抗しえず、この輝かしい郷土芸能が後継者の減少とともに、いつの日にか故郷からも忘れられる時があつてはならぬとの願いを込めて、ここに郷土芸能を録画録音し、これを保存するだけでなくいっそうさかんに後継者育成の資料として活用したいと願ひ、～中略～旧三社氏子の有志に特別出演をお願いし、この運動会場で発表する運びとなったものであります。



担い手の減少により、やむなく絶えてしまったことに対する無念の思いと次代につなげていこうとする強い意志が伝わってくる。

ビデオでは、「鳥越白山神社」「八幡宮」「物部神社」の鬼太鼓三種を見ることができる。前二者は、湧上型である。それぞれ特徴的な味わいで、特に「八幡宮」の鬼はユニークな舞様である。後者は、前浜型で、現在の小倉の鬼太鼓となっている。

またこの時、小倉小学校ではすでに教育活動の中に鬼太鼓を取り入れていた。同年の運動会の記録には、練習の成果を披露する児童の姿が映っている。学校での鬼太鼓の開始は、昭和49年のことだ。以来地域の指導者（育成会）を招聘し、1年生から6年生までのすべての児童に笛・太鼓・鬼の舞を指導している。長年の地域連携により、現在では学舎を巣立った卒業生が父母となり指導者として学校に舞い戻ってきている。四月の祭りでは、小倉の鬼を誇らしげに舞う児童の姿、それを見守る保護者や地区の人々の様子が印象的である。このようにして、学校の取り組みは、地域文化伝承のサイクルの中にすっぽりと組み込まれてきた。結果論であるが、小倉では、「子どもを交えた継承」の形を選択したことになる。

小倉小学校児童としての舞姿は、残念ながら来年度からは見ることができない。小学校は、24年度をもって閉校となり、139年の歴史に幕を閉じることとなるからだ。

しかし小倉における児童の継承活動の消滅は、今のところない。今後の地区内における子ども鬼太鼓の活動継続に対して、育成会が強い意志をもっているからである。

#### 〔南片辺〕

南片辺には獅子舞や薙刀・太鼓などが伝承されている。ここの「御太鼓」と呼ばれる太鼓には、「小木太鼓」、「昔太鼓」、「かわら太鼓」、「そう太鼓」などの種類があり、宵宮では、獅子舞とともに白山神社に奉納され、本祭では、集落全戸に門付けが行われる。特徴的なのは、これらの太鼓のタイプすべてが異なることだ。このことは呼び名からも推測できるが、おそらくは、それぞれもとの出自が違う。つまり、いろいろな太鼓を集めて、創作も加えつつ一連の芸能に仕立て上げていったのだろう。ここでは以前、大獅子もあったそう。

佐渡の人々は、良い意味での「芸能喰い」で、お

もしろいと思った異種のを組み合わせ、それらを祭りという枠組の中で他の集落にはない独特な芸能として創り上げることに天才的な能力を発揮する。こうした例は、北川内、北田野浦、久知八幡、赤玉杉池祭りなど枚挙にいとまがない。

今一つ注目したいのは、伝承の歴史である。南片辺では、高度成長期、男性の多くが都会に出稼ぎに出て、芸能の担い手がいなくなり、数年間の祭礼中止を余儀なくされた。この時期、鎮守（白山社）の周辺では火災をはじめ不幸が続いたという。そこで動いたのが女性陣である。なんとしても祭りを再開したいとの思いについに婦人部が核となり立ち上がったという。この地区では、女性による祭りの継承を選択したわけで、男性、それも長男による伝承意識が強い中での思い切りは、相当なことだったと推測する。その後、継承の範囲はさらに拡がり、子どもたちにも伝えられるようになっていった。担い手がいなかったという状況下での究極の選択であったとはいえ、伝えようとする強い思いが、何らかの活路を見出すということを教えてくれているように思える。

#### 〔浦ノ川内〕

南片辺の事例は、集落内での婦人部や子どもへの担い手の変化や拡大であった。浦ノ川内の場合、その目は集落の外に向けられた。周辺地区からの協力による文化継承の取り組みである。

このところの浦ノ川内の祭りで少々驚いたことがある。門付けの際、突然この地区でこれまで聞かなかった太鼓が響き渡ったからだ。理由を聞いて判明したことだが、ここでは、松ヶ崎、多田等周辺集落からの応援により門付けを行っているため、時に興に任せて応援地区の鬼が舞う。以前の姿を思い描いていたため一瞬戸惑った私であるが、しばし門付けの人たちと共に地区内をまわるうちに、こうした風景が違和感なく自然に思えてきた。というのも、他地区からの応援の人たちも当然のように祭りの担い手として迎え入れられ一体化し、響き渡る太鼓は、まさに浦ノ川内の太鼓として溶け込んでいるからだ。考えてみれば、一地区に数種の太鼓を持つ例は他にも見られる。先の南片辺の御太鼓も一気に四種が揃ったわけではないだろう。

「人がいない」というのは確かにマイナス面かもしれない。しかしここでは、逆転の発想で新しい太鼓も受け入れ、周辺地区も巻き込んだ新たな楽しみを生み出している。こうしたエネルギーはきわめて

魅力的である。こうして、鬼太鼓は今でも再生され続けている。

#### 【豊岡】

担い手不足打開の試みが、海を越えた交流によりさらにダイナミックに展開している例がある。ここ数年、豊岡では、新潟大学教育学部森下修次研究室の学生が、祭りの担い手の一部として参加している。彼等は、祭りの前になると集落に泊まり込み、舞を習い、太鼓を習得する。神社の清掃や飾り付けなど、祭りの準備にも参加し、当日は地区の人と一緒に家々を門付けしてまわる。鬼太鼓の魅力は相当なもので、多くの学生が祭りの虜になり、卒業してからの参加者も少なくない。今では、海を越えた新潟で、学生による鬼太鼓を見ることも珍しくなくなった。現にこの原稿を執筆している研究室にも、学生の打つ豊岡の太鼓が聞こえてくる。

この取り組みは、NPO法人佐渡芸能伝承機構の仲介によるもので、黒根など、活動は他の地区にも広がりをみせている。鬼太鼓や佐渡の各地区の祭りが、現代の若者をはじめ、島外の人にとっても大きな魅力であることの証左でもある。

#### 【春日】

鬼太鼓を伝承する組織自体が、その成員の開放的な意識の方向性とエネルギッシュな活動の結果、地区の祭りを盛り上げ、良い意味での競争的な風土の中で質的なレベルを高めるとともに、島外をも含めた広範でダイナミックな活動を展開している例がある。春日鬼組はその典型だろう。

鬼太鼓の担い手不足が叫ばれる中、春日では、毎年新鬼が誕生する。新鬼の名前は、祭りの日山車（やま）に大きく張り出される。一見何でもないような風景であるが、こうした掲示の仕方にも鬼組の考えがよく見て取れる。すなわち、子どもの鬼を新しい大切な仲間として受け入れ、彼らが春日の舞を習得したことを喜び、地区の人々に紹介しつつ、祭りを盛り上げていこうといった思いである。24年度は、6人の名前が書かれていた。小学校1年生や女子も見られる。新鬼の初舞台として待ち受けているのは、子ども用の発表の場ではない。本番の門付けである。一人前の鬼として門付けし、祭りに十全に参加することが重要なのだ。新鬼の中には、春日の鬼を舞いたいと他の地区から参加した子どももいる。「思わずやってみたくなる」のが春日の鬼太鼓である。祭りの当日、鬼組のメンバーは、鬼太鼓に

没頭し、ハイレベルの太鼓と舞が、きわめて楽しそうに次から次へと繰り出される。演ずるのは、若者だけではない。ベテランも積極的に参加し、それぞれ往年の味わいを醸し出す。時に島外の観光客まで、提灯持ちとして引きずり込まれたりする。

このように、鬼組は、子どもから若者、年配者まで多様な年齢で構成されている。しかも早い時期から女性の参加も受け入れており、すでに数人は鬼組にはなくてはならない存在となっている。近年では、アメリカの女性太鼓奏者の巧みな佇さばきも見ることができた。

これらに加えて特徴的なのは、その活動範囲が広くて多様なことにある。また、伝統を核としながらも新しさに対する姿勢は柔軟だ。種々のワークショップや異種団体との交流も積極的に行う。たとえば、以前新潟大学で行った体験授業や学会でのワークショップでは、教え方や参加者を巻き込むコミュニケーションの取り方に脱帽した。

春日鬼組の歴史は八十年を超えた。おそらくは、伝統を維持しつつも新しいモノやコトを受け入れること、伝えること、交流しつつ様々につながることを、これらが自身のエネルギーとなってはね返り鬼組の成長や祭りの隆盛に向かうということを、80年間鬼太鼓と真正面に向き合いながら身に付けてきたのだと思う。

## 4 継承への模索

以上、民俗芸能の伝承について、芸能の構造及び伝承の形とその変容に焦点を当てて、事例を紹介しつつ考察してきた。これらの中に、つまりは、佐渡の人々が積み上げてきた歴史の中に、鬼太鼓継承の今後に対する答えが隠されているように思える。そのキーワード、キー概念を私なりにまとめてみる。

まず強調したいのは、多様性の積極的な肯定である。しばしば佐渡には百を超える太鼓があると言われるが、まさにその通りで、どこの鬼太鼓を見ても同じものは一つもない。これらは大きくいくつかの型に分かれつつ、さらに枝分かれし、最終的には個々の鬼太鼓に行き着く。つまり、さまざまなレベルで多様なのである。多様であるからこそ、それらが集まった時はおもしろい。多様であるからこそ自負も生まれる。佐渡の鬼太鼓は、個々の集落の担い手が「自分たちの鬼太鼓」の意識を強くもっているからこそ成立している。いわゆる正調を持たないことの強みである。南片辺や浦ノ川内、豊岡、黒根の

事例は、「自分たちの鬼太鼓」を次代につなげるという強い思いの現れだ。過疎化の中での多様性の維持は極めて困難な作業であるが、その方向性は、今後一層大切にすべきだと考える。仮に佐渡の鬼太鼓を一種類に統一したら奇妙なことになるだろう。どこの祭りをまわっても、同じ太鼓が聞こえてきたらおかしい。統一は一瞬のパワーを産み出すとしても、長い目で見れば、芸能の持つ力を削いでいくことにつながる。

二つめは、その土地に根ざすことの確認だ。鬼太鼓はムラの祭りの中に存在する。日々の生活の上になくってはならないものとして、その土地の成員の共同による表現として成立してきた。小倉の太鼓、春日の太鼓など、佐渡では普通に呼ばれる「〇〇の太鼓」の意味は大きい。昔と違い、現在の鬼太鼓の担い手は、必ずしもその土地の住人とは限らない。両津、新潟、東京など、普段は集落を離れて生活をし、祭りの時に参加する人も多い。また、鬼太鼓は性格上、土地を離れて演ずることも容易に可能である。観光を前面に押し出すこともできてしまう。こうした中だからこそ、一年の決められた日に決められた場所で、祭りの一連として行われる鬼太鼓の意味を見直す必要があるだろう。そうしないと、鬼太鼓もその担い手も糸の切れた風ようになってしまう。

第三は、鬼太鼓の存在価値の再確認である。過去や現在において、鬼太鼓が担ってきた役割や価値を今一度見直すことが必要ではないか。人と人、人と生活を結び付け、集落の維持や文化の核となる鬼太鼓、共同の表現を持つことの素晴らしさの認識である。これらは多くの日本人が過去に捨て去ってきた。それ故に現代社会に様々な病が蔓延し、またそれ故に今こそ必要とされるものでもある。この点から見たとき、南片辺婦人部の選択は、きわめて意味がある。困難の中、南片辺では芸能を捨てようとしなかった。これはすごいことだと今更ながら思う。

第四に、Web構造の活用があげられる。

前述した鬼太鼓の持つ特性は、今後意識的に活用すべきではないだろうか。

鬼太鼓は叩き手と舞い手の身体が呼応し、立ち現れる共有の表現行為であった。また、門付けに見られるように、その周囲の人々までも取り込む力を持っている。さらに「点在・移動・参集・競合」といった性格は、コミュニケーション力として働き、大規模な人のつながりを生み出していく。このような鬼太鼓の機能への着目は、伝承の危機を乗り越え

て、日本のみならず世界との交流の多様な可能性を秘めているように思う。

最後に、伝える形や内容の固定性と変動性を見極めることを主張したい。つまり、何を守り何を変えるか、次にどのような選択をするかといった問題意識である。

芸能の形や伝承の形態は、ともすれば固定的に考えられがちだ。「変わらない」ということは確かに重要な要素になり得るが、同様に「変わる」こともまた必然ではないだろうか。これまであげた事例は、すべてが変容の歴史である。「芸能喰い」が新しい芸能を創出し、担い手の性別や世代、居住地もまた時代によって変わってきた。鬼太鼓を演ずる場も多様化広域化している。その中で守られてきたのは、祭りであり、土地の文化であり、何よりもその時その時に大切にされてきた人々の文化に対する意味や思いである。「私たちにとっての鬼太鼓とは何か」。危機の時々にこの問いが立ち上がり、鬼太鼓への意味や思いの問い直しと再確認が行われ、その結果が共有されてきた。そして何を変え何を変えないかが見極められ、物理的な困難状況を超えて選択されてきたのである。その際、変わるものは大胆に変えていった。祭りを伝えるということは、そういうことだと私は思っている。

本稿は2012年11月3日、佐渡市真野ふるさと会館にて行われた新潟大学人文学部佐渡市教育委員会連携協定事業「鬼太鼓 舞う・叩く・伝える」における講演内容を再構成した。